

コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2022年1月19日

Nature論説：

新型コロナをゼロにすることはできない：ウイズコロナの道を進むべきだ

【松崎雑感】

Nature論説の紹介です。新型コロナは、SARSやMERSのように消え去ることはなさそうです。インフルエンザと似たような継続的流行病となるのかもしれない。数年前に収録されたNHKの「世界街歩き」再放送を見ると、マスクなしでにぎやかに人々が交歓している場面が懐かしい。もうあのころには戻れないのでしょうか？ Life goes on.

新型コロナをゼロにすることはできない：ウイズコロナの道を進むべきだ

COVID is here to stay: countries must decide how to adapt. Nature. 2022 Jan 10. doi: 10.1038/d41586-022-00057-y. Epub ahead of print. PMID: 35013606.

オミクロン変異株は、様々な困難をもたらす病原体として存在し続ける

2022年は、年頭から世界各地で感染者が増加に転じた。2020年の初頭と同じことが起きている。オミクロン株が津波のように増えて医療システムを圧迫している。ベースライン免疫として、あるいはブースターとしてのワクチン接種は、この状況を押さえるうえで間に合っていない。

オミクロン株が、従来の変異株よりも重症化率が低そうだという事はグッドニュースである。パンデミックの行方についての最悪シナリオは当たらなかつたと言えそうだが、社会生活は再びダメージを受けている。

多くの医療スタッフが感染の為に休職しているため、医療機能は低下し、学校は閉鎖され、再びリモート授業に戻っている。そして、国を超えた人の往来は制限されている。重症化して入院が必要な人々の比率は少ないが、爆発的な感染率増加によって、命の危険にさらされ長期間の体調不良をきたす人々の実数は極めて増えている。

これは特にワクチンを受けていない人々、とりわけ小児について言えることだ。

2021年には新型コロナは終息するだろうと期待していた人々にとって、現状は厳しいものとなった。2022年は、パンデミック前の「日常」に戻ることを目指すのではなく、新型コロナとともに生きるという認識に転換すべき年だ。

それぞれの国がどのようにコロナと付き合っていくかを判断しなければならない。ウイズコロナとは、コロナを無視することではない。

それぞれの地域で、新型コロナ感染による健康被害と感染予防のためのマスク着用あるいは企業活動の制限などを考慮し、経済的社会的コストとのバランスを検討する必要がある。ワクチン接種率、薬物治療可能性、流行株に対応したバランスを考慮すべきである。

昨年11月のオミクロン株流行以降、新型コロナとともに暮らさざるを得ないというステージに入ったと言える。

感染力の強いデルタ株が激増した国もあるが、ワクチンと既往の自然感染による免疫により、重症化がしっかり防止されてきた。

その後集団免疫と感染防止対策および検査と隔離対策の徹底によって、重症化を防止する事ができ、今後の新型コロナ流行による被害は軽くなるだろうと多くの研究者は予測した。ただしそのように考える政治家は少なかったが。

ウイルスゲノムの変異による免疫回避はゆっくり進み、感染を防ぐ免疫機能の低下は緩やかに発生するだろうと考えられてきた。しかし、オミクロン株は、予想を上回る免疫回避機能を持っていた。

現在、新型コロナの再感染は珍しくない。代表的なワクチンがこの変異株に十分な効果がないことも分かってきた。現在のワクチンは、最初の感染株に対応して開発されたものであり、感染防止効果を保つためにブースター接種の必要性が増している。

しかしバッドニュースだけではない。

ブースター接種により、重症化と死亡をしっかりと防ぐことが分かっている。動物実験では、オミクロン株は、上気道に多く増殖し、下気道（肺）にはあまり増殖せず、肺炎のリスクが少ないようだということが分かっている。いくつかの国の臨床データでは、オミクロン株による重症化率は少ないと報告されている。

ただし、それが、この変異株の特性なのか、ワクチン免疫あるいは自然免疫の増大によってもたらされたかは、さらに検討が必要である。

現在の感染増加に対応して、各国は様々な対策を進めている。豊かな国ではブースター接種を進めているが、貧しい国はその余裕がない。ふたたびロックダウンを実施する国もあれば、病院機能を圧迫するほどの感染拡大が起きるかどうかを様子見している国もある。

ワクチンが不足している国が多いため、さらに新たな懸念変異株が発生するおそれが高い。オミクロン株の例で明らかになったように、ある程度の免疫が存在する下では、ウイルスがどのように変異するかを予測した従来のモデルではとらえきれない複雑さが存在する。

感染モデル専門家は、ワクチン接種状況、既感染歴、免疫の低下状態、ブースター接種、変異ウイルス、新たな抗ウイルス薬の開発などの要因をすべて取り込んで今後の感染パターンを予測しなければならない。

しかし、既往の自然感染とワクチン接種によっても、パンデミック当初から期待できないとされた**集団免疫が、やはり成立しない**ことが明らかとなった。

新型コロナは、消え去るのではなく、地域的流行病として存在し続けるだろうというのが大方の予想である。

ワクチンは重症化と死亡を防げるだろうが、新型コロナを根絶することはできないだろう。

オミクロン株などの変異株流行によって明らかになったのは、ワクチンの不足している地域へのワクチン供給が喫緊の課題であるという事だ。

これまで、歴史的にワクチン製造の中心地で亡かった南アフリカのような国々でのワクチン製造が進んでいる。ワクチン接種を世界全体で進めることは、すべての国にとって利益となる。

ワクチン接種率の低い国々は市中感染が止まらず病原性の高い変異株の生まれる素地を提供している。さらに、このようなウイルスが、PCR検査と遺伝子解析率の低い国々に拡散して流行を引き起こす。

幸運なことに、2022年は、mRNAワクチンよりコストが安く保管方法が簡単な蛋白ベースワクチンが世界中で使用できるようになるはずだ。

WHOは12月に長い間待たれていたノババックス社の蛋白ベースワクチンの緊急使用認可を出した。特定の新型コロナ変異株に有効なワクチン、あるいは噴霧あるいは経口投与できるワクチンの開発も進んでいる。中国とイギリスの企業は**鼻腔噴霧ワクチン**を開発中である。

一方、経口投与できる**抗ウイルス薬**が発病初期から使用でき、重症化と死亡を減らすことが明らかになっている。これも新型コロナ治療にとって朗報である。

モルヌピラビル（メルク社）、パクスロビド（ファイザー社）が最近緊急使用許可を受けている。他にも同様な効果の薬剤が開発中である。

これらの動きによって、新型コロナ対策が世界的に進むだろう。希望と楽観の生まれる由縁である。政府は科学者の声に耳をかたむけ、ウイルスの変異を追跡する必要がある。

今後のウイルスの振る舞いがどうなるかわからないが、ウイズコロナの新しい生活を作り出さなければならない。